

# 観光レクリエーションに利用されるデスティネーションの 地理的集散状況の経年変化を定量的にモニタリングする手法の検討

田中伸彦 [東海大学観光学部]

キーワード：観光・里山・デスティネーションマネジメント 福島県只見町 メッシュ分析

## 1. 研究の背景・目的

近年、持続可能な森林管理を実現するため<sup>1)</sup>、あるいは生態系サービスの一角を構成する「文化的サービス」<sup>2)</sup>を持続的に享受するために、観光レクリエーション(以下:レク)に係る森林地域や里山の変容をモニタリングする手法の開発が進められている。例えば我が国では、前者では林野庁が「モントリオール・プロセス」の基準・指標づくりを行い「モントリオール・プロセス国別森林レポート<sup>3)</sup>」を公表している。具体的には、観光に供される森林の面積割合や自然公園等の利用者数、観光施設の量的推移をまとめている。後者では、里山/里海のモニタリングに基づき、過去50年間に里山/里海がどの様に変化してきたのかを経時的に評価し、一覧表にまとめた事例が知られている<sup>4)</sup>。ここでは「文化的サービス」を、「精神」「審美」「レク」「芸術」の4つに分け、各々で取得可能なデータを元に「文化的サービス」の向上/劣化について判断し、現状をまとめている。

この様に、我が国の森林地域や里山がモニタリングされ、経年変化が定量的に評価され始めているが、そのほとんどは、国を一単位とした広域データに基づいている。要するに、国内の個別具体的な地域ごとの状況が、どの様に時系列的に変容しているのかをモニタリングする有効な手法は少ない。

## 2. 研究の目的・対象・方法

上記の背景を踏まえ、本研究は観光レクに着目し、経年変化によりデスティネーションがどの様に変容するかをモニタリングする手法の開発を目的とした。

対象地は、既報<sup>5)</sup>で中山間地における観光レクに関連する生態系サービスの地理的構造の分析調査を行った福島県南会津地域の一角にある只見町とした。

方法は以下のとおりである。まず、対象地内を3次メッシュ(1kmメッシュ)に区切り、各メッシュ内に存在する観光資源・施設を把握した。次にそれらの重要度を(財)日本交通公社の基準<sup>6)</sup>に基づき判定した上で、5×5メッシュのフィルタリング法により各メッシュの得点を数値化し、メッシュ図を作成した<sup>7)</sup>。なお、対象地域内の既存観光資源・施設数と場所については、1998年と2013年の2時期の「全国旅そうだん(旧全国観光情報ファイル)」データベース<sup>8)</sup>を活用した。

そして、上記の手法で作成された2時期のメッシュ図のポテンシャル値をもとに、対象地域内の観光レクデスティネーションの地理的集散状況が、どの様に時系列的に変化したのかを示す定量的指標づくりを検討した。

## 3. 結果及び考察

解析の結果、只見町内には1998年で45件、2013年で52件の観光資源・施設が確認された。要するに、単純に件数で見ても町内に観光デスティネーシ

ョンとなりうるべき資源・施設が増減している事実を確認できる。

続いて、フィルタリング法による解析を行った結果、1998年と2013年との間でピークメッシュの得点変動や位置変動などが確認された。つまり、2時期のフィルタリング法の解析結果の比較において、観光レクのデスティネーションの核となるピークポテンシャルの変動などを確認することができた。

さらに、新たな試みとして、2時期のフィルタリング法解析の得点の「差分」を計算した。その結果、町内における観光レクポテンシャルの得点変化を定量的かつ地理的に示すことができた。この差分のメッシュマップは、観光レクのデスティネーションとしての、その地域の魅力度の量的変動を表す指標に活用可能だと考えられた。

もう一つ、新たな試みとして、町内の観光レク資源・施設の新規創出・消失状況を確認し、それに伴う得点変動の2乗をメッシュごとに計算する指標を提案した。その結果、町内における観光レクデスティネーションとしてのコンテンツの変容を示すことができた。この指標は、デスティネーションとしての、その地域の魅力度の質的变化を表す指標として活用可能であると考えられた。

#### 4. まとめ

以上、福島県只見町を対象に、観光デスティネーションの地理的集散状況の経年変化を定量化する手法の検討を行った。そして、単なる資源・施設数の変動や、既存のフィルタリング法によるピークメッシュの変動に留まらず、地域の魅力度の量的変容を表す指標と、質的変容を表す指標の2つの指標を開発、提案することができた。これらの手法は既存データがあれば国内外で応用可能な手法であるため、汎用性が高いと判断できた。

なお本研究は、科研費基盤研究(C)(課題番号:24580226)の助成を受けたものである。

#### 【引用文献・補注】

1) 田中伸彦ほか(2011) モントリオール・プロセスにおける持続可能な森林管理と観光, 東海大学観光学部紀要 1, 1-14 2) 「生態系サービス」とは、人類が生態系から得ている利益のこと。水・食料・燃料などの「供給サービス」、気候・受粉などの「調整サービス」、精神的充足やレクリエーション機会の提供などの「文化的サービス」、酸素の生成・土壌形成・栄養や水の循環などの「基盤サービス」から構成される。 3) 林野庁(2003) 『モントリオール・プロセス第1回国別森林レポート2003(日本)』, 林野庁, 58-62 4) 国際連合大学高等研究所日本の里山・里海評価委員会(2012) 『里山・里海:自然の恵みと人々の暮らし』, 朝倉書店, 201p 5) 田中伸彦ほか(2011) 中山間地における観光レクリエーションに関連する生態系サービスの地理的構造, レジャー・レクリエーション研究 68: 46-47 6) (財)日本交通公社がまとめた「観光資源台帳」を原則として活用したが、ランクCおよびDに相当するリストは公表されていないため、基準に沿って各資源・施設の判定を筆者側で行った。 7) 田中伸彦・渡辺貴史(2002) 中山間流域における森林管理上重要な観光レクリエーション地域の構造域の構造, ランドスケープ研究 65(5):615-620 8) 全国たびそうだん((社)日本観光振興協会)URL: <http://www.nihon-kankou.or.jp/index.php>